ZOCALO 2017 4▸5

ZOCALO＝ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

建畠館長　開館35周年に語る――揺さぶる美術館へ

オーソドックス×エキセントリック

美術館のこれからを語る建畠晢館長

この美術館は今年、開館35周年を迎えます。試行錯誤やトレーニングの時期を終えて、よく言えば安定軌道に入ることができたと言えるかもしれません。県内で唯一の県立美術館ということで多くの県民の要求や期待に応えることを求められるので、いろいろな意味で総花的でバランスが取れていることが必要で、逆にあまりに個性的で何かに特化するラディカリズムを打ち出しにくいというところはあります。県の直営ということもあって、ある意味では地味なところがあるかもしれませんが、美術館としての基本的な使命の軸線をずっと守り抜いています。それは当たり前じゃないかと思われるかもしれませんが、公立の美術館が全部そうかというと必ずしもそうでもないんですよね。それはこの美術館の良さだと私は思っているので、今後も維持していこうと思います。そこを基盤に、ユニークな性格やその時々の要求に応じた斬新な方向性をプラスしていきたい。

この美術館はどちらかといえば、近現代美術に特化した展覧会をきちんと企画していくことを本筋としています。それは守るべき伝統だと思っているし、もちろんレベルの高い展覧会をやっています。私の役割はそこに揺さぶりをかけること、いわゆる美術館のレパートリーと違ったジャンルのものを持ち込むことです。例えば、私は2014年の「戦後日本住宅伝説」展に関わりましたが、私自身が建築に興味があるということ以上に、美術館のキャパシティを広げていきたいということがあったんです。うまくいけばそれが定着していくんですよ、異例なものが恒例化していく。やっぱりその美術館ならではの、その美術館の学芸員ならではの能力を発揮した展覧会というのはそれなりの迫力を持つと思います。ユニークな部分は、自分がやることもあるかもしれませんが、館長として学芸員に多少けしかけてもいいと思っています。

昨年度から始まった「アーティスト・プロジェクト #2.0」*は、ある意味ではオーソドックスだけれども、美術館で若い人の個展というのはなかなかできないんですよ。小規模でもいいから若い人に自由にやらせるようなユニークな企画もあっていい。場所は館内どこでも使っていいし、あるいは屋外でもいい。あまり他ではやっていない、ちょっと尖った企画を散発的に織り交ぜていくことも考えています。

*これまでのMOMASコレクションや企画展の枠を超え、学芸員が現在活躍しているアーティストを自由に推薦する展示プログラム。

「戦後日本住宅伝説」展の展示風景

コレクション×コネクション

一般の方から見れば、展覧会をやっているところが美術館だと思われるかもしれませんが、それと同時にコレクションの充実というもう1つの柱があります。この2つはある意味では車の両輪のように結びついていて、コレクションの充実は当然常設展示という形で返ってくるし、あるいはそのコレクションが国内外のさまざまな美術館に貸し出されてその展示の充実にも協力できます。埼玉の美術に関するきちんとしたコレクションというのはこの美術館の使命だし、もちろんモネのように国際的な名品も集めたい。ところが残念ながらこの十数年間、この美術館に限らず日本全体の美術館が財政的な危機に陥っています。当館はすでに約3,400点の作品を収蔵していますから、1回に100点くらいを順番に見せていけば何年かはいろいろな作品を見せる機会を提供できます。しかし長い目で見ると、新しい作品をそこにプラスして県民の資産を増やしていく、あるいはさまざまな傾向の新しい息吹の作品をそこに増やしていくというのは美術館の責務ですから、何としても購入予算を復活させたいと思っていました。おかげで2年前からある程度の作品を買える予算が付き始めたので、今後もこれを基盤にして、時代の証言であるような作品を増やしていく、あるいは皆さんが見たいと思う名品を購入できるところまでいければいいなと思っています。

美術館のコレクションというのは、それ自体が県の文化活動の基盤となると同時に、その収集の活動を通じて市民やアーティスト、コレクターや画廊との接点が生じるんですね。そこでいろいろな情報が入ってくるし、こちらからも情報を提供する。それが新たな企画の発想につながったり、あるいは直接展覧会に出品されたりということがあります。美術館と社会との接点という意味でも、年々新しい作品を調査し購入していくというのは大きな意義があるので、これを継続していけるよう今後も努力していこうと思います。

美術館×公園

この美術館の1つの大きな特色は、都心で駅前にある北浦和公園の中という非常に恵まれた立地条件です。この空間的な利点をもうちょっと生かしたいと思っています。この公園は2年前に、大きな木を残しつつゆったりと憩える芝生の広場を整備しました。美術館が公園の外からも見通せるようになり、美術館と公園の一体化がこの再整備で進んだと思います。そういう基盤が整いつつあるので、例えばこの芝生広場の要所要所に彫刻を中心とした皆さんに愛されるような作品を置いていくことで、この公園の魅力がさらに増すと思うんですね。一部の予算はそうした彫刻の新設や再配置につなげていきたいと考えています。また今ちょっと考えているのが、テンポラリーな野外インスタレーション。若手の彫刻家や建築家に頼んで、作品自体がテンポラリーなインスタレーションをつくってもらうものです。イギリスのサーペンタイン・ギャラリーが建築家たちに頼んで夏季限定のパビリオンを設営するシリーズがあるんですよ。これはかなりのお金を出して大きな造作物をつくりますが、それの小型バージョンというイメージです。

こんな風に、美術館と公園がうまくシンクロして魅力を発揮するということに少し挑戦してみたい。もちろん予算や管理・安全性の問題などもあるので思いつきですぐにはできないですが、この5年以内に何かの形で実現したいと思っています。

昨年10月8日から10日まで、アーティストユニットL PACK.のプロデュースによるイベント「たとえば、美術館に三日続けて行ってみるとする。」が開催されました。美術館エントランス外を舞台に、パビリオンの構築（写真上はその完成記念式典の様子）やカフェ（写真下）、野外上映、マーケットなど3日間限定のさまざまなプログラムを実施。来館者だけでなく公園を通りがかる人も三三五五立ち寄っていき、のんびりとした心地よい時間が流れました。
詳細はL PACK.のホームページでご覧いただけます。
www.lpack.jp/momas2016/

美術×異ジャンル

私は今まで国立国際美術館に勤めたり、愛知や横浜のトリエンナーレに関わったりしてきましたが、そこでかなりのエネルギーを注いできたのは、美術の施設の中にいかに美術以外のジャンルを呼び込むか、シャッフルさせるかということです。演劇やダンス、音楽それぞれの専用のホールには、専門のプロデューサーがいて、音響も照明も演出もきちっとできるようになっている。もちろんそういった専用施設は重要なんですが、なんかこう分断されていくんですよね。ジャンルはジャンルごとに囲い込まれていって、あまり横の交流が起きなくなってしまう。アーティストも観客も、専門的には充実していくと同時に、分断されていくところが残念だと思っています。この美術館ではもちろん展覧会をやるのが基本ですが、その中にパフォーミングアートや音楽的な要素といったものをなるべく持ち込んでいきたい。美術作品が共存しているような状況の中でパフォーマンスや演奏があること自体に積極的な意味があると思っています。「すべての芸術は総合的な状態を憧れる」という言葉があるんですよ。例えば文楽とかオペラとか、もともと総合的な芸術ってありますよね。一方それと正反対の「すべての芸術は純粋な状態を憧れる」という言葉もある。どちらが正しいということではなくて両方あっていいんですが、どちらかといえば時代は分断される方に向かっていると感じています。そういうときに美術館があえて苦労してでもそこに揺さぶりをかける。それは多くの人にとって新鮮な刺激になるし、そこから新しい表現や発想が芽生えていくと思うんです。

大げさに言えば、私は美術館の空間自体が1つのメディアであると思っています。美術作品だけでなくあらゆるものがこの空間から発信されていく。そこには講演会やシンポジウム、コンサートなどもあるでしょう。これは私の妄想ですが、この美術館の中で芝居をやってみたい。どこかのカンパニーと組んで、地下のセンター・ホール、あるいは建物の中を移動しながらでもいいんですよ。夢物語としてはバックヤードにも入っていくみたいなね、無理かもしれませんが。美術館というこの空間を我々自身も再発見して刺激を受けるような、そんなことができないかとも思い描いています。

2017年2月10日
聞き手：N.O.

ロシア科学アカデミー図書館所蔵　川原慶賀の植物図譜
二〇一七年四月八日（土）―五月二十一日（日）

長崎の画匠、川原慶賀

異国の品々や文化があふれる国際都市・長崎で活躍した江戸時代後期の絵師、川原慶賀（一七八六―一八六〇?）。慶賀は出島オランダ商館への出入りを認められ、オランダ人たちの注文に応えて日本のあらゆる文物を描いた絵画を制作しました。とりわけ、ひなまつり、花見といった現代でもなじみ深い年中行事をはじめ、諏訪大社での夏越祓や子供たちの行事である陸ペーロンなど長崎ならではの歳時記、また、日本人が生まれてからあの世へ送り出されるまでの通過儀礼を描いた「人の一生」など、長崎の風俗や情景を描いた作品は、当時の暮らしを物語る貴重な記録にもなっています。

一方、日本の人々にとっても、西洋の風俗や西洋人の肖像は好奇心をそそるものでした。出島に出入りして彼らの生活を間近に見ることができた慶賀は、生彩ある筆致でそれらを描き出しました。

慶賀については特に、医師、博物学者として来日したシーボルトとの交流が知られています。シーボルトが最も関心を寄せたのは、日本の植物でした。彼は出島に大きな植物園を整備するだけでなく、長崎周辺や江戸参府の途上で植物採集を行い、日本中の植物の研究に尽力しました。

日本の植物をヨーロッパで紹介しようという野心を持っていたシーボルトにとって、植物画は非常に重要なものでした。近代的な植物学に基づく植物画には、植物の形態がよく分かるようなアングルで描くことや、蕾から花、実など植物がたどる成長段階を一つの図に描き入れることなど、いくつかの決まりごとがあります。慶賀は西洋画の陰影や明暗表現だけでなく、西洋的な植物画の描き方を学習し、植物のかたちを正確に描写した作品を制作しました。とはいえ、慶賀の植物画は「ありのままに写す」ことにとどまりません。大胆な画面構成や細部への丹念な描き込み、繊細な色彩によって、慶賀は植物の持つ生命感を損なうことなく、独特の情緒を持った作品を生み出しています。

この展覧会では、シーボルトがヨーロッパに持ち帰り現在ロシア科学アカデミー図書館に収められている慶賀の植物図譜から一二五点の作品を紹介するとともに、国内に所蔵されている作品・資料もあわせて、町絵師・慶賀の足跡を振り返ります。ちょっとゆるい素朴な画風から迫真的な写実表現まで、オランダ、日本双方の注文主の求めに応じて様々なスタイルを駆使して、江戸時代後期の日本を写し取った慶賀の眼をたどる機会となれば幸いです。（H.S.）

《長崎の年中行事「子供中、陸ペーロン」》19世紀、長崎歴史文化博物館蔵
（展示期間：4月8日～5月1日）

《ビワ》1824-1828年頃、ロシア科学アカデミー図書館蔵
《Russian Academy of Sciences Library》. St. Petersburg 2017

はみだしソカロ 023　頭はいっぱいいっぱい　心は満たされる　美術館の昼　だけどやっぱり　腹は減る（Song・22歳・男性）

はみだしソカロ 024　展示の力技：森村泰昌に逢う「クラーナハ」展。最初に最終作品《Color》が迎える「山田正亮展」。闇を仰ぐラスコーの洞窟。キュレーションと鑑賞の鮮やかな裏切りと摩擦がいい。（回遊魚・年女・F）